

17世紀イングランド常備軍論争3 (翻訳)

藤原 浩一

S O M E
R E M A R K S

Upon a late Paper, Entituled,

*An Argument, shewing, that
a Standing Army is In-
consistent with a free Go-
vernment, and absolutely
destructive to the Constitu-
tion of the English Mo-
narchy.*

*Latin to Him's no more difficile,
Than to a Black-Bird 'tis to Whistle,
So Learn'd---that he can in Dispute
Confute,---Change Hands, and still Confute.*

Printed in the Year 1697.

最近出版された「常備軍は自由な政府とは調和せず、イングランドの王政にとって決定的に有害であることを示す主張」¹と題するパンフレットについてのいくつかの意見²

私は今までに何度か説教壇から英国国教会は二組の窃盗犯に苦しめられているという話を聞いたことがある。一方はカトリック教徒で、もう一方は長老派である。そして残念ながら現在、イングランド政府は二組の愚者に苦しめられていると思う。全く陸軍を持たないことに賛同する人々と、陸軍を保持することに全面的に賛成の人々である。前者は敵に対して我が国を無防備にしてしまうし、後者は我々国民を身ぐるみ剥ぎ取ってしまう。私の意見では、このパンフレットの著者は前者の言い分を弁護しており、依頼人の事件の範囲を超えて、すべてを洗いざらいしゃべってしまった正直な弁護士のようなものである。しかし、結局のところ、彼のパンフレットに示された、我が国の陸軍は危険で、無益であるという考えに同意せざるを得ない。そして、この陸軍は都会の伊達男と似ていると思う。というのは見事に着飾ってはいるが、何の役にも立たないのである。さらに、ラテン語の切れ端について話をすすめると、「作品が題材を凌駕している」。それは政府を苛立たせ、破滅させ、混乱させてしまうような実行不可能な狂想曲である。そして我が国を同盟国もなく無防備にする。実際に彼は自分でも、またパンフレットの17頁でもそのように説明しているように思える。そこでは、「世の中での少しばかりの経験で気づいたのであるが、たいてい人間は権力にとまなう、可能な限りの害をなすものだ」と述べている。この著者自身がこれらの人々の一人だと思えるし、以下の行で示されているように「そのような人物は子供や、精神障害者のように取り扱うべきであり、彼ら自身や他人に危害を加えるような武器はすべて取り上げるべきである」という指示は、まさに彼自身にあてはまると思われる。そして近寄る人をペンとインクで塗りたくる以外に何の使い方も知らないような人々にはペンとインクは不適切な武器となると思う。そのパンフレット全体は同じ聖書からの説教である。すなわち山上で我々の救世主に悪魔が説いたものである。「白らを投げ出しなさい。というのは天使にあなたを糾弾させると書いてあるから」、など。そして、そのときと同様に、正気な人で、このテキストが悪意に満ちたものであることを疑う人はいないと思う。悪魔の足跡がこのパンフレットのあらゆる頁に刻印され、すべての行が羨望、憎悪、悪意、そして無慈悲さそのもので満ちている。さらに、現代の舞台の英雄のように、彼は味方や敵の双方を殺害してしまう。彼は何度か海軍の不様な行動に対して激怒して、序文で次のように述べている。「海軍は海上から海賊ではなく、我が国の商船を追い払ったのだ」、など。それは海軍本部の話である。それから陸軍については、28頁で示

された彼の言葉によると、「彼らは不道徳で、規律の墮落した人々であり、殺人を職業とする人々である。彼らは、報酬額以外のことは何も考えず、主義の正当性などについては何も問うこともしない。彼らは不誠実で、貪欲で、自己弁護に残酷である」。いや、そればかりでなく、彼は陸軍の兵士の勇敢さも認めていない。それは20頁にあるように、この著者は彼らを「棍棒で打たれて鍛えられた浮浪児」だという。19頁では我が国の大臣をお粗末な政治家だと呼んでいる。そして5頁では、彼はホイッグ党員に攻撃の刃を向け、「暴政の召使い」と呼んでいる。これは実際に度を越したものであり、私にラテン語の文章を思い起こさせた。「幾分かの狂気がなければ誰も詩人にはなれない」。私は残念ながら、この著者はやぶ医者に手術を受けたのだと思う。その医者は彼の頭の中に水銀を残したままだったが、それでも彼の血は同時にひどく酸性のように思われ、もう一度水銀を必要としたようだ。政府高官であれば不思議なことではないだろうが、おそらくこの著者は大臣になりたいと望んでいるのであろう。そしてこの方法で空席を生じさせたいのだと思われる。しかしこの理由を尋ねてみたいのだが、彼のこれほどまでに痛烈なホイッグ党員全体に対する悪口は何なのか（彼は自分がホイッグ党員だと公言しているように思われるので）。彼はホイッグ党員の立派な行為のどの部分に泥を投げつけているのか教えてもらえないだろうか。ホイッグ党員の大多数は、この件に関して、過去の二人の国王の治世においてと同様に、彼らの信念を、堅固かつ大胆に維持したのではないか。国王が交代しただけで、現実には交代しなかった先の政府は、この話で面目を失ったのではないだろうか。H.K. が楽しそうに語ったように、この政府は入れ替えのない更新であった。しかしさらに論を進めると、彼らは自分たちの不名誉に対して不合理なまでに怒りを示しただろうか。彼らはジャコバイトと合流したり、政府に反対しただろうか。いや、彼らを忌み嫌い、彼らの方でも嫌っていたものが自分たちを統治していたにもかかわらず、彼らは金目当てに賛成票を投じたのである。そして、なお一層容易で、かつ効果的に資金私集める方法を得たのである。そしてその政府のもとで、（風向きの他に、誰をも公平に扱うために）ハーグであなた方を救いだしたのはホイッグ党ではなかったのか。そして私が記憶しているかぎり、そうしたことで彼の面目を失わせようとしているのか。（いい顔はしなかったけれど）ホイッグ党員が、危機に際してしっかりと政府を支持したのであった。そのようにして彼らが政府に参加したと言って、この著者の怒りを買ったのである。これが争いでない限り、ホイッグ党員が侵略されない希望を持っていることに私は当惑する。そしてそれは純粹に分別ある用心から生じるものであり、決してさもしい服従ではない。それを疑うことは慈悲心の欠乏と同時に良識のなさを示すことになる。というのは今まで軍隊での士官

の経験もなく、軍隊がなければ不安だと思っている人で、軍隊に賛成している人を知らない。しかしおそらくこの著者は、15年前のホイッグ党と同様に、今のホイッグ党にも賛成だ、と私に告げた紳士と同じ意見なのであろう。私はホイッグ党員だが、(自分でホイッグ党員だとわざわざ認めるような人にはお金をやろうと、哀れなアイロスがパーカーに自慢げに告げたように)私は確かに「ホイッグ党員」であり、著者と同じぐらい根っからのホイッグ党員だと自認しているが、それでも私は15年前のホイッグ党そのままのホイッグ党には賛成しない。すなわち、当時ホイッグ党員が経験したように、拘留され、罰金を課せられ、鞭打たれ、曝し台に立たされ、絞首刑にされることはいやだからである。もし我々がこの著者の計画に参加すれば再び同じ目にあうかもしれない。いや、ホイッグ党員は、今までこの国を守ってきた極めて勇敢な軍隊、この9年間、自国を防衛するために未知の国々で飢えながら戦ってきた軍隊を解散してしまうことなどは決して適切だとは思わない。我が国の防衛のためにこの著者とその一派が他の方法を用意するまで、食べるパンもなく、最初に血にまみれ、そして生命を保つための十分な物資もなく、この著者のような遍歴の騎士でもなく、自分自身の身を守るという本能的な目的のために、フランスの強大な軍隊を相手にドンキホーテのように風車との戦いに専念した。しかしこの紳士には好きにさせてあげよう。この治世を通して大多数のホイッグ党員の行動はすべての正直で公平な人々によって永遠に支持されるだろう。というのは、私がすでに述べたように、世間が関心を持っているところはどこでも、気むずかしい顔つきで彼らを憤慨させることもなく、微笑みが彼らに害をなすこともなかった。いっぽうこの著者は、他人の評判を好き勝手に利用して、かえって自分自身が疑われている。それは同胞を告訴する背教者の墮天使の性格だからである。彼のパンフレットの次の部分は、我が国の軍隊の解散に関して馬鹿げた見解で満ちあふれている。そしてスパルタ方式とかスイス方式とか、もしくはどのような方式であれ、彼ら流の新しい計画で満杯である。しかし、著者自身が主張しているこれらの用意周到な記事の中で二点のみは検討する必要がある。

第一に、軍隊がなくても安全だという主張。

そして

第二に、軍隊は確実に、前触れもなく突然に、奴隷制度を招くという主張。

第一の点はきわめて馬鹿げているので誰もそんな考えは持たないだろう。

フランスが30万人の軍隊を維持しているとき、イングランドが無防備でいることが適切と言えるだろうか。フランスが鋤を剣に持ち替えているときに、イングランドが剣を鋤に

持ち替えるべきだろうか。フランスが（外国の通信記事にあるように）イングランドの同盟国が解散した軍隊を自分たちの軍隊に受け入れようと待ち構えているとき、今こそ我が国の軍隊を改革すべき時ではないだろうか。戦力化するためにこれまでに莫大な時間と費用をかけ、海外では我が国の栄光を獲得し、国内には平和をもたらし、フランスの強大さや、イエズス会士の抜け目なさをもものともせず、彼らの自尊心を奪い去り、彼らの策略をくじいたこの軍隊を解散するべきだろうか。さらにこの著者は壮麗な言葉や、いくつかのお粗末なラテン語の切れ端と歴史を用いて、（美辞麗句を用いるサー・フォーマル・トライフルのように³）訓練を受けていない市民軍というねずみ取りの罠にイングランド議会を取り込もうとしているのか。彼はフランス国王とジェームズ二世のためにペンの一筆で、それを実行しようとしているのか。それは私がすでに述べたように、世界で最も卓越した技量と力量をもってしても失敗した試みである。もし彼がそうしているのなら、彼は疑いなく（少なくとも）自分の党派にふさわしい立派な意見の持ち主である。

しかし彼は次に第三点について述べている。すなわち軍隊は危険で、確実に突然国民を隷属化する、など。そしてこれを証明するために、まず初めに彼は軍隊によって隷属化された政府について、冗長で退屈な話を持ち出している。アテネ人がビシストラトス⁴によって、コリント人がティモファネス⁵によって、シラキュウス人⁶がアガソクルス⁷によってなど。そしていくつかの国々が自分たちの防衛のために徴募した軍隊によって隷属化された話を持ち出して、自国の安全のためにどれだけ必要に迫られたとしても、いかなる国も軍隊を維持するべきではない。これは極めて愚かな考えだと思うし、同じ理由で、鶏肉の尻肉でのを詰まらせた人がいるからといって人間は食事をしてはならないと言うようなものだ、としか答えようがない。私も著者と同じように軍隊に賛成しているわけではないが、自然の法則はすべての人に自分の安全を抱きしめるように教えているし、その点だけで私は軍隊維持に賛成しているのです。私は軍隊がなくても安全であるとの著者に確信させてもらいたいです。そうすれば私が軍隊を放棄するようにわざわざ修辞を用いて説得する必要はない。しかし、パンフレットの12頁で著者が述べているように、「時折、軍隊で自分たちを守らなければならない不運な人々は、すべての国々にとって不運である」。もしそうであれば、差し迫った危険を外国の嫉妬に置き換えることは、どのような国にとっても賢明とは言えない。しかしただじっと座ったまま聖書の国王とともに考えるのである。一万人で、二万人の軍隊を率いてきた彼に対抗できるだろうか。我々の主張と国王の要求は妥協できるだろうか。

——無防備の無邪気さは強大な国を攻撃に走らせる誘惑となる。

もし我々に自分たちを守る準備ができていれば、十中八九まで、もし万一我々がそのような状況になったとしても、この著者の12頁の言葉を使えば、「その国は確実に平和に過ごせる、戦争にも最も有能となる。そして自分のそばに剣を備えている人はそれを使う必要がほとんどないだろう」。しかし続けて、この著者は語る。この軍隊は海軍と市民軍でなければならない。この最初の点に関して、19頁の楽しそうな態度にもかかわらず私は告げなければならない。我が艦隊を港に閉じ込める、その風が同時に敵にとっては好都合となる場合も起こりうる。R.提督はすべての水先案内人の忠告に逆らってダウンズに入ったがそのときの潮の機会を利用しなかったとしたらあなたの言う文章はどうなっただろうか。私が受け止めているように、この耳障りのよい文章は我が国を救ってはくれなかったであろう。ハーグからの急襲を一体、何がくじいたのか。カレーからの急襲は、逆風だったこと以外に、何が防いだのか。そしてもし彼らに対抗する軍隊がなければ、彼らが上陸したときに、あなた方をダンケルク、カレー、サンマロー、プレスト、などなどからの侵略から守るのは誰なのか。というのは、アイルランド人があなたに教えてくれるでしょうが、艦隊は（鳥でない限り）あちこちに飛び回ることはできないのです。そしてその上、我々は一度ならずフランス艦隊が我が国の艦隊を眼前にしながらいづれに自国の港に出入りしていたのを目にしたことがある。そして名誉革命において、我が国の現在の国王⁹は、彼の艦隊を壊滅させてしまうのに十分な艦隊が海上にいたにもかかわらず、イギリス海峡を通過してしまっただけではなかったか。そしてイングランド艦隊の存在にもかかわらず、陸軍を無事に上陸させてしまった。そして同じ芸当をどうして他の誰かがすることはできないのか。そのようなときにはどうすればよいのか。だったらエリザベス一世と同様に、国王は訓練された軍隊と市民軍の先頭に馬に跨り、ティルベリーへと向かうのか。そして正気な人は、そのような鳥合の衆が当時女王を守ることができたのか。それとも訓練された軍隊に対抗して、今我々を守ってくれるのか。いや、残念ながら、もしスペイン軍が上陸していれば、哀れな女王は、市民軍がいたとしても、ラテン語の文章をくりかえす経験をしていただろう。彼女が囚人としてロンドン塔に幽閉されるとき⁸に使った言葉である、「羊のように」。

いいでしょうか、彼女は艦隊や市民軍によって救われたのではなく、常備軍によって守られ、さらには彼女の救援に駆けつけたホスト卿の軍隊によって救われたのです。（予言者が語っているごとく）嵐と暴風雨の中を、そしてひどい竜巻の中を。もしフランス軍の計画が人間ではなく、天候によってくじかれることがなかったなら、正規軍に対して、訓

練を受けていない市民軍の哀れな戦いぶりや、哀れな防衛力をこの著者自身が確信したときには、手遅れとなったことは疑いない。このような市民軍の保護下にあるとき、我々は実際にボカリンの羊と同じ境遇を経験することになる。(著者は18頁で述べている)アポロに願う、「フランスのオオカミに牙を持たせないでほしい」と。しかし、フランスのオオカミが牙を持っている限り、疑いなくすべての妻や正直な夫は軍隊の必要性に賛成したほうが適切だと思うだろう。この著者に専制君主のバグベアの悪口を与えよう。というのは、もし我々が自国の安全を市民軍のみに委ねるなら、私は、復活に関するセント・ポールの言葉で理由を述べる必要があります。「そのとき我々はすべての人々の中でもっとも惨めであった」。我が国がこの戦争に費やした四千万は無駄になろう。失った三十万人の生命は無駄となろう。いや、さらにこの栄光ある平和は、きわめて高価な代償を払って獲得したが、無駄となろう。しかしこの著者は市民軍がウィリアム三世に役立つと主張し、この目的のために21頁で、理由と原因からなると思われる計画を示している。これに対して、そのような市民軍を目にしたときには、私はより明確に自分の意見を述べるができる。しかしそれまでの間、もし著者自身の言葉による、現在の軍隊は市民軍を有効なものにしたのとほとんど変わらない、ということが私に証明できれば、我々の論争は終わるだろう。

この著者は22頁で、市民軍を貴族とイングランドのジェントリから士官を選び、市民軍の中核をフリーホルダーや、彼らの息子や召使いなどで占めることにしているの、「そのような市民軍にはいつでも生命、自由、財産の守備を任せられるし、そのような軍隊からはなんの危険も生じない」と、述べている。

現在のイングランド陸軍は正確にこのように構成されているという事実は否定できないと思う。9年間の軍役や、無限の障害と困難を経験してのち、このように実戦的に仕上がった市民軍に、戦争が終結したのち、どうして自国の防衛を任せられないのか。彼らは勇敢に、忠実に外国で防衛した。この著者の学識のある華やかな主張からは納得のいく理由が見つからない、と私は告白せずにはおられない。その彼は17頁で印象的でスマートな文章で我々に告げている。彼の言葉によると「軍隊は資金を調達し、その資金で軍隊が徴募されることは明白である」。

これは注目に値する見事な、調子よく響く言葉だと認める。そしてその言葉の中にすべてが含まれている。クロムウェルの軍隊はどのようにして資金をひねり出したのであろうか。彼らはいった金額は集めなかった。なぜなら彼は大部分を金を探しに西インドへ派遣した。そしてもし彼が国内で資金を集めることができれば、そんな遠隔地に派遣す

る必要はなかったと思う。しかし物事の真実は、これはイングランドの市民軍の軍隊であった。著者のモデルのイングランド紳士とフリーホルダーの関係者や使用者で構成されていた。そして誰がこの軍隊を指揮したとしても、この軍隊の構成がこのようであれば、彼らは、あえて言えば、常に国民の多数の傾向に従って行動する。これまで彼らはそのように行動してきたので私は確信している。いや、著者は28頁で述べている。「クロムウェルの軍隊は議会を追放した。議会のもとで彼らは長年、成功裏に戦ってきた。のちにモンク将軍⁹の指揮下で彼らは自分たちが以前に立ち上げた政府を破壊した。そしてチャールズ二世を見事に招き入れた」。これは、もし私が間違っていなければ、私の断言などを証明する。それはイングランドの紳士によって指揮された市民軍はそしてフリーホルダーの関係者は召使いから構成されていれば、イングランドの国民の多数の意見と傾向に常に入り込む。現在のところイングランドの国民の大多数は残党に飽き飽きしているので、軍隊も国民にあきあきして、彼らを追いだした。そしてイングランド国民の大多数はチャールズ二世を復活させようとする傾向があり、軍隊もこの傾向に加わり、そして彼を迎え入れた。

この著者はおそらく、彼らはこれら両方の件において自分たちの将軍の意向に従ったのだと言うだろう。私はこれを否定する。というのは当時、ランバート¹⁰の軍隊は自分たちの将軍の側にたつ十分な理由があった。モンク将軍の軍隊の二倍の数があったのだ。しかし国民には当時モンクによって企画された革命に賛同する傾向があった。軍隊は国民と協調してランバート側からモンク側へと反乱を起こしたのである。ジェームズ二世の軍隊の反乱は国民の一般的な不満から起こったのである。したがって我々はこれまでの訓練を受けていない人々や、陸軍に現在の彼らに対する恐れによって、外国の軍隊に対して無防備のままにしておくことで心配する理由は見つからない。そしてこの偉大な将軍が完全に新兵を熟練させるまで、私は今までのものを続けて使ったほうがよいと思う。

残念ながら私は新しい同盟国に平和を破るように誘惑しているのは確かである。(陸軍を解散すること自体が危険にさらすことになると思う) 私は喜んでフランス軍の侵略の恐怖から免れて、ぜひとも残りの人生を楽しみたい。そして告白させてもらうが、分別をわきまえたイングランド人が異なる考えを持っているなどと思うと不思議でならない。また私は、この著者でさえも自分の言っていることを信じているとは思えない。しかし私は、彼はおそらく彼らはスカラーという名前の新しいセクトの一員だと思う。彼らは(ある紳士が機知に富んだ言葉で述べたように)恐怖におののいているような振りをして斧で切る人々である。なぜなら彼らは気持ちよく悲鳴をあげ、偉大な君主が自分たちの栄光のため

だけに戦争をするときに書き立てたり演説をするように考えているからなのである。めったに見出すことのできないものを、あまりにも探し求めることに熱心すぎて、そしてそれが見つかった時には何の価値もないと気づくのである。

全体的に見て、もしそうであるなら、私が考えるように、これまで述べられたことから判断して、それは明白に思われる、陸軍がイングランドの貴族、紳士、そしてフリーホルダーで構成されているなら、国民の大多数の意見と常に合致してきた。自分たちの主人や将軍を放棄したり、見放したりする。私が既に述べたように、ランバートとジェームズ二世の場合のように。もし最愛の人であったチャールズ二世が、完全には彼のことは知らなかったが、トリックをしようとせず、そしてジェームズ二世がそれをしたときにこれまでひどい苦しみを味わなかつたら、私は国内において陸軍に征服されないために解散させることによって外国による征服の危険を冒すようになる、現在の陸軍をそこまで心配する理由は私には見当たらない。そしてもしこの軍隊が政府に対して明白な愛情をもつ士官によって注意深く配備され、議会によって給与が支払われ、一年ごとに更新されるのなら、議会の軍隊となる。そして毎年、彼らの善行によってのみ継続される。彼らは聖書にも書かれているように、墮落しないように注意を払わなければならない。そしてこの場合、このように処理されたなら、継続することに何の反対の理由も見出せない、特にこの著者が自分の主張を実行に移すまでは。そして、残念ながら私は、彼が最善を尽くしても、彼の市民軍はオシアナ共和国¹¹やユートピア¹²を守ることしかできない衛兵ということを証明することになるだろう。彼の統治はそのような場所でのみふさわしいと思う。しかし結局のところ、もし他の種類の市民軍が実戦的になるようなことがあれば、もしくは外国の情勢が我々の不安を減じるような事態になれば、私は心から陸軍の解散に賛成する。というのは、以前に述べたように、私はこの著者と同様に陸軍は好きではない。我が国の防衛のために是非とも必要なときでない限り。陸軍は、今回は、そうだと考えさせてもらいたい。この紳士の力強い能弁にもかかわらず、彼は読者を圧倒しようとしている。

しかし私はこの有能な著者が、正直で真のイングランド人の精神を支配するようなことがないように希望する。そして、ライオンや熊のかぎ爪のある足から我々を解放してくれたこの強大な、割礼をうけていないペリシテ人が、ゴリアテの力強いペンからも我々を解放してくれるだろう。

終わり。

あとがき

本稿は以下のパンフレットの翻訳である。

Some Remarks Upon a late Paper; Entitled, An Argument, shewing, that a standing Army is Inconsistent with a free Government, and absolutely destructive to the Constitution of the English Monarchy. London: 1697. 以下、Some remarks と呼ぶ。

ルイ十四世によって企てられ、1688年から97年にかけて戦われた九年戦争が1697年9月20日に調印された「ライスウィック条約」(Treaty of Ryswick)により終結し、神聖ローマ帝国皇帝も10月30日に調印に応じて、一応の終結をみたが、イギリス名誉革命によって国王に迎えられたウィリアム三世は、先王ジェームズ二世を支持するルイ十四世と対立しており、現実には亡命中のジェームズ二世がフランスでルイ十四世に保護されている状況下では、容易に警戒を緩めるわけにはいかなかった。イングランドに帰国したウィリアム三世は、ヨーロッパ情勢にイングランド国民一般より精通しており、なおヨーロッパ情勢の変化に即応できるように、イングランドに陸軍を維持し、常備軍としたいと、1697年12月3日開会予定の議会に要請するつもりでいた。この和平条約締結後からイングランド議会開会前の一ヶ月あまりの間に、常備軍(陸軍)反対の主張をかかげたのが、匿名ではあったが、共和主義者 John Trenchard (1662-1723) と Walter Moyle (1672-1721) 共作のパンフレット、*An Argument, Shewing, that a Standing Army is Inconsistent with a Free Government, and absolutely destructive to the Constitution of the English Monarchy.* London: 1697 であった。(以下 *An Argument* という)。このパンフレットの主張は「平時における常備軍の維持は議会の承認を得なければならない」という、名誉革命において調印された「権利の章典」にもとづくものであった。このパンフレット出版に端を発し、国王擁護派と反対派のパンフレットを中心とした論争が燃え上がった。これらのパンフレットは多くの場合、正確な日付は確定されていないが、1697年10月から1699年末までに、その大多数が出版されている。しかしこの *Some Remarks* の著者は特定されていない。またその英文自体も明瞭さに欠けることが多い。「17世紀イングランド常備軍(翻訳)」『語学教育部ジャーナル』第2号、2006年、151-178 参照。

これら常備軍論争に関するパンフレット出版の詳細については、Lois G. Schwoerer, "Chronology and Authorship of the Standing Army Tracts, 1697-1699". *N. & Q.*, ccxi (1966), pp. 382-90. 参照。この384頁によると、*An Argument* は1698年に第二版出版後、1706年、1727年、1751年、1817年と再版されている。また、*An Argument* 第二部 (Second Part) が1697年12月に出版されている。他に同じ著者による "The Literature of the standing

army controversy, 1697-1699". *HLQ*, (May, 1965), pp. 187-212. や、"The Role of King William III of England in the Standing Army Controversy - 1697-1699", *The Journal of British Studies*, Vol. 5, No. 2 (May, 1966), pp. 74-94. などがあり、その修正として、J. A. Downie, "Chronology and Authorship of the Standing Army Tracts: a supplement", *N. & Q.*, August, (1976), pp. 342-346. がある。Downie は *An Argument* 出版を 1697 年 11 月 22 日としている (p. 343)。

ラテン語和訳に関しては京都大学大学院准教授、高谷修氏に貴重なご教示をいただいた。記して謝意を表したい。

注

- 1 正式な題名は *An Argument, Shewing, that a Standing Army is Inconsistent with a free Government, and absolutely destructive to the Constitution of the English Monarchy*. 1697 年末出版された Trenchard と Moyle によるものであるが、当時の慣習として著者名は明記されておらず、代わりに A.B.C.D.E.F.G. と署名されている。出版の日付は Lois G. Schwoerer の 10 月説と A. Downie の 11 月説があるが、12 月 3 日の議会開会より前であることについては学説が一致している。Paula R. Backscheider は Defoe: His Life, 1998 において 10 月説を踏襲しており、John Richetti も *The Life of Daniel Defoe*, 2005, 73 頁で、10 月説を採っている。
- 2 正式な題名は *Some Remarks Upon a late Paper, Entitled, An Argument, Shewing, that a Standing Army is Inconsistent with a free Government, and absolutely destructive to the Constitution of the English Monarchy*. London, 1697.
- 3 Thomas Shadwell (c.1642-92) の *Virtuoso* (1676) の登場人物、Sir Formal Trifle。
- 4 Bisistratus *An Argument* においては Pisistratus とされている。本パンフレットの著者の誤記と思われる。Pisistratus はアテネの僭主 (c.605B.C.-527B.C.)。 *An Argument* において、「彼は自分の護衛のために五十名の衛兵をアテネ市民を巧みに説得して認めさせ、その衛兵を増員し、城と政府を掌握し、国家を滅亡させ、アテネの専制君主となった」と記されている。(*An Argument*, 8 頁。)
- 5 Timophanes 紀元前 366 年、コリントの専制君主となったが暗殺された。
- 6 Siracusians シラクザー人: イタリアのシシリー島南東部の港市、コリントの植民市として紀元前 734 年ごろに建設された; アテネとの戦争による戦場 (415-413 B.C.), 第二ポエニ戦争時の戦場 (212 B.C.), シラクサ、シュラクサイとも言う。
- 7 Agathocles アガトクレス (361-289B.C.): シラクザーの僭主 (317B.C.-289B.C.)
- 8 エリザベス一世 (1533-1603) は、姉メアリ女王によってロンドン塔に短期間監禁され、

1554年5月に解放後、Woodstock Manorに1年近く軟禁された。

- 9 George Monck (1608-70), または Monk, 1st Duke of Albermarle and Earl of Torrington, モンク, マンク。クロムウェルのもとでスコットランド駐留軍司令官であったが、1660年にチャールズ二世に味方し、初代アルバマール公爵に叙せられた。
- 10 John Rambert (1619-83) クロムウェルのもとで早くから軍人としての才能を発揮して活躍し、クロムウェルの後継者と見なされていたが、残部議会を解散したことで、議会側にたったスコットランド駐留の George Monck 将軍の介入を招いた。南下する Monck 将軍を迎撃するために北上したが、配下の兵隊がいつの間にか、離脱してしまった事件。
- 11 オシアナ共和国、『オセアナ』、イングランドの古典的共和主義思想の政治哲学者 James Harrington または Harington (1611-1677) による 1656 年の共和国論。
- 12 ユートピア Sir Thomas More 作の *Utopia* (1516) で描かれた理想郷としての空想の島。